

# フランス横断の旅

11期 村尾 俊治

平成24年9月6日発、21日着の16日間の旅をした。友人の田中一男氏(70歳までに再度の独旅行の約束)、小生、そしてドイツの友人石原 収氏との3人で車によるフランス横断旅行である。最初に旅行の概要について紹介したい。全走行距離4,000Km(日本縦断の2倍)で、フランス横断3,000Km・ドイツ1,000Kmであり、ドイツのシュトゥットガルトが起点・終点の旅である。費用実績(会計担当 田中氏)は、1人1日当たり7,500円の貧乏旅行である。現役の時、パリ中心の旅をした。5星?ホテルに泊まり、そこそこのレストランで食事、著名な観光名所を見学と言った旅に比べるとフランス的な臭いのしない生活レベルの低い旅である。安く出来たのは為替が有利であったこと、友人の石原氏の車での移動、加えて彼の精力的な宿探し。毎日3~4軒の宿を探し回り、3人1室で格安の宿を見つけてくれた。道中、小生と石原氏との関係を田中氏は察したと思うが、2人の関係は友情深いものであると勝手に考えている。大先輩に『よき人生とは、よき友人に恵まれる事』と教わったが、真にそう思う。表面的でなく深い友情に根ざしている事が肝心なのは言うに及ばないが。

今回の旅のテーマは「城」である。個人的なテーマとして「絵」になるいろいろな風景に接したいと思った。平成23年7月に満70歳を迎え時、60歳代とは少しく違う事を始めたいと考えた。今までよりもっと細かい観察眼を養いたいとの思いもあり、高校までやっていた水彩画を実に52年振りに始めることにした。そこで「量は質を高める」を信条に、20ヶ月で100枚の水彩画を描こうと、挑戦的な目標を立て、現在は最終段階に入っている。そんな訳で、今回の挿絵は写真でなく、小生の水彩画を使うことにした。以下は旅程に沿って旅の様子を綴ることにする。

## <シュトゥットガルトからフランスへ・・・>

ドイツ中央のやや南にあるシュトゥットガルトを出発、シュバルツバルト(黒い森:モミの木)を南下しドナウエッシンゲンへ。以前、ドナウ川を巡る旅(オーストリア、ドイツ)をしたが、ドナウの源泉には行かなかったので、今回 雄大なドナウ川の源泉を訪ねた。省エネ都市 フライブルクを経てフランスへ入る。一面にブドウ畑が広がり、ワインフィールドで有名なボーヌへ。ここで郊外にある風

車を見つけた。のどかで印象的な風景である。次はいよいよ



ドナウ川の源泉



ぶどう畑と風車

ロワール川沿いの城巡りである。まずはジャンヌダルクで有名なオルレアンでは、銅像やゆかりの家に行く。そして後ほど触れるが、ロワール川沿いの14箇所の城を見た後、ジャンヌダルクの処刑地であるルーアンへ行くことになる。ここには彼女の記念碑が建立されている。彼女が活躍した英仏戦争時代の城は戦争用に作られていた。その後は宮殿用に改装され、現在見物できる城は15～16世紀に改装されたものが多い。以下、見物した城を列挙する。

シャンボール、ブロワ、ショーモン、アンボワーズ（レオナルド・ダビンチ博物館が隣接されている）、ロッシュ、ヴィランドリー、ランジェ、アゼルリドー、ユッセ、シノン、ソミュール、アンジェなどである。これらの中からロワール地方随一の城としてシャンボール城の絵を載せる。ここの城巡りで唯一の失敗は、シュノンソー城を見過ごした事。この原因は一時に沢山の城を見過ぎたためである。

<世界遺産のモンサンミッシェルへ・・・>

ここからは城とお別れし、ブルターニュ地方のサン・マロと世界遺産のモンサ



シャンボール城



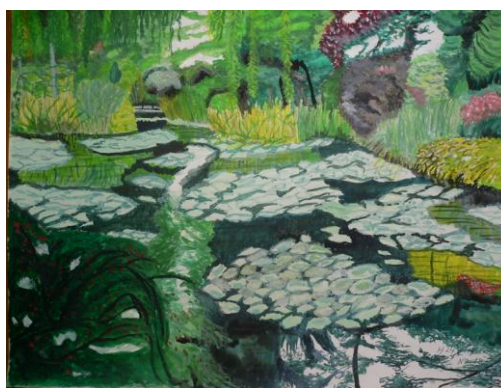
ディナンの塔

ンミッシェルを訪ねる。サン・マロの少し手前にディナンの町があり、15～16世紀の古い町並である。ここには、ランドマークのように聳える塔があった。田中氏が登ってくると言って走りだした。彼は前回のドイツ旅行では高所恐怖症だったのでびっくり仰天。本当に上まで登ったのかと尋ねたらイエスとのこと。人は時と場所により、大きく変わるものなのです！次に行ったサン・マロは小生にとっても初めての所でした。一言で言えば、ここは「城壁に囲まれた町の島」でした。地続きなので入口まで車で行け、観光客相手のお店がぎっしり並んでいた。ここで食べた海鮮料理は大変美味しく、隣席のイギリス客夫婦に我々3人の食事風景をデジカメに撮って貰った。

同じく島であるが、こちらは教会であり、世界遺産であるモンサンミッシェルが次の目的地ある。以前来た時は、すぐ近くまで車で行けた。ところが、本土と島を繋ぐ長い道は潮の流れを遮断し、自然環境を破壊する恐れがあると言うことで、現在長い橋を建設中であつた。そのため観光客は遠方の駐車場に車を止め、専用シャトルバスで運んでくれるが、このバスは長いので、Uターンがしにくい。この解決策として、前後に同じ運転席を設け、正にピストン運転そのものである。フランス人の合理性には色々と感心させられるが、代表例は信号機が不要な「ロータリー式」交差点である。今回ドイツもこれを認め、数年前からどんどんロータリー式に変えている。やれば出来るということである。モンサンミッシェル名物のオムレツは美味しかった。日本とは味が少しだけ異なるが、久しぶりに和食を食べた思いがした。



モンサンミッシェル



モネの睡蓮池

(田中氏の独り言：交差点のロータリー文化は日本人には馴染がない。が、4,000 Kmを走破中に一度も交通事故を目撃しなかった

こと。又、信号機が不要な点を考えれば、地震国日本には有効な方式では・・)

モンサンミッシェルを後にし、いよいよノルマンディーのオマハビーチへ。ここはドーバー海峡に面し、映画「The Longest Day(史上最大の作戦)」で衆知でしょう。先端が霞むほど長い長い砂浜で、16 Kmに及ぶ上陸艇を組み一斉上陸がなされた海岸です。印象的なのは、ドイツ側の遺物は何も残されていない。残されている物は全て連合軍側の記念碑等だった。田中氏が記念碑を見ながら言った。この上陸作戦は軍人同士の戦いだったが、太平洋戦争の原爆投下のような民間人を巻き込んだ戦争は絶対に許せいと・・。

ここからセーヌ川沿いに走る。セーヌ川河畔は著名な画家が好んで行き交った所と聞いている。代表的な所として、画家モネの館があるジヴェルニーへ行く。モネは40歳まで世に知られてなく、40歳になってこの地に家や庭園、有名な睡蓮の池などを造り印象派の代表と言われる絵を描いたようである。ここでは、世界各地から本当に多くの人々が押し寄せていた事に驚かされた。絵の好きな人には必見である。

(田中氏の独り言：モネの作品に加え、彼が買い集めた無数の浮世絵が展示されていた。当時のフランスでは日本文化への憧れが強く、日本人にとっては誇りに思える展示であった)

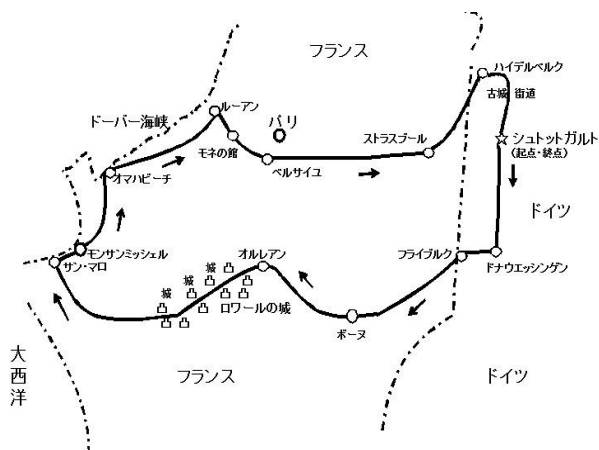
セーヌ川はご存知のようにパリの真ん中を走っている。渋滞を避けるためパリを避け、南郊外を通過して久しぶりにベルサイユ宮殿に行った。例の広い庭園を見たが、ここまでに美しい自然美を多く目にしたためか、莫大な財で造られた庭園から感動は得られなかった。そしてフランスの最後はストラスブールである。歴史的に何回もドイツ領になった地であり、フランス語による最後の授業のあった学校が残っていたが、訪れる時間はなかった。

<再びドイツへ・・・>

フランスに別れを告げ、ネッカー川沿いにハイデルベルクへ。ここは学生の町と古城(廃墟)で有名である。ケーブルカーで古城に登り市街地を一望した後、今度はドイツ古城(廃墟)街道を走り、主に車窓から10箇所 of 古城を見た。ライン川沿いにある城は修理され、ホテルになっている所が多いが、このネッカー川沿いは崩れかけた城跡のオンパレードである。そして、ネッカー川の源流に近い出発地シュトゥットガルトへ無事に帰って来た。ここでは、日本人がラーメン屋をやっていると聞いて、「喜久屋」に行った。拙いラーメンであ

ったが、雪さんと言う若い日本人妻に会った。日本語・中国語・ドイツ語・英語を話す働き者である。旅行では若い女性の働き者を見ると直にコンタクトしたくなる。元気を頂くため、国籍は問わないで会話することは大変楽しい。小生の第二の郷里エスリンゲン市へ久し振りに行った。当時お世話になった野菜類を売る店や料理器具を売る店等々を回ったが、大きく様変わりし、なくなっている店には寂しさを覚えた。この地に住んでいたのは、15年～17年前であるから、当然だとは思いますが・・・。

最後に、旅の疲れをとるためバッドウルラッハの温泉で半日ゆっくりし、その夜はドイツに永住している友人とドイツ女性(友人)を招き、当時からずっと付き合っているイタリヤ料理店「ドメニコ」へ行った。愛想のいい料理人夫婦は元気で、再会を大変喜んでくれた。



全走行図



エスリンゲンの二人：右筆者